「カップルでソープランドに勤務中、VIP客から『彼氏さんも同席して』と言われ、同席したぼく」

第一部：はじまり ― 純粋だった頃

1. 海斗 ― 青い挫折

海斗にとって、高校時代のすべては「野球」だった。
地方の強豪校で内野手として起用されていた彼は、誰よりも努力し、誰よりもストイックだった。彼の世界は、白線の内側にあるダイヤモンドだけだった。

彼にとっての快楽は、快音と共に打球を飛ばすことではなく、泥にまみれてボールを追い、完璧な送球を三塁手に送るという「正確なコントロール」に快感を得ることにあった。自分の身体を完全に制御し、役割を完璧に遂行すること。それが彼の自尊心のすべてだった。

しかし、運命は残酷だった。
3年生の夏、甲子園への切符をかけた準決勝。海斗は激しい激突に巻き込まれ、右膝の靭帯を完全に断裂した。

激痛よりも先に、彼を襲ったのは「喪失感」だった。
医師から告げられた「競技復帰は困難」という言葉は、彼にとって死刑宣告に等しかった。昨日まで世界の中枢にいた自分が、明日からはただの「足を怪我した少年」に成り下がる。

海斗は、自分を定義していた「野球選手」という皮を剥ぎ取られ、中身が空っぽになった。

周囲の期待、チームメイトの視線、そして自分への失望。
彼は次第に、自分の人生をコントロールできないことへの強い恐怖と、同時に、すべてを投げ出してしまいたいという破壊的な衝動に囚われるようになった。

彼は、努力すれば報われるという神話を信じていた。だが、現実は残酷にそれを裏切った。
この時の「自分の価値が根底から崩れ去る」という強烈な経験が、彼の精神に深い刻印を残した。後に、彼は「自尊心が破壊されること」に、言いようのない安心感と快楽を覚えるようになる。

2. 美奈 ― 硝子の鳥籠

一方、美奈は、地方都市の裕福な家庭に生まれた。
父親は厳格な教育者であり、母親は社交的な主婦。美奈は幼い頃から「理想の娘」であることを求められた。

成績優秀、行儀良く、誰からも好かれる少女。
彼女の人生は、あらかじめ決められたレールの上に置かれていた。ピアノを習い、進学校に入り、名門大学へ進む。そのすべてが、彼女自身の意志ではなく、親が描いた「美奈という作品」を完成させるための工程だった。

美奈は、自分の内側に、どす黒い「空白」があることを知っていた。
誰にも言えない、けれど激しい渇望。
「誰かに、めちゃくちゃに壊してほしい」
「正しくあることに疲れた。汚い言葉で呼ばれ、理性を剥ぎ取られたい」
そんな衝動を、彼女は完璧な笑顔の下に隠し続けた。
彼女にとって、社会的な「正しさ」とは、自分を閉じ込める透明な鳥籠だった。

彼女が唯一、自由になれたのは、深夜に一人で読む背徳的な小説や、誰にも見られない場所で自分の体に触れる時間だけだった。

彼女は、自分を救い出してくれる「破壊者」を待っていた。
自分という塗り固められた殻を、力強く、容赦なく砕いてくれる存在を。

3. 邂逅 ― 欠けたピースの合致

海斗と美奈が出会ったのは、大学に入り、互いに方向性を失っていた頃だった。

海斗は、野球を諦め、なんとなく籍を置いた大学で、虚脱感に浸っていた。
美奈は、親の意向で選んだ学部で、完璧な優等生を演じ続ける日々に絶望していた。

ある雨の日、大学の図書館の片隅で、二人は出会った。
海斗がぼんやりと外の雨を眺めていたとき、隣に座った美奈が、ふと漏らした溜息。それが、あまりにも深く、絶望に満ちていたため、海斗は思わず声をかけた。

「……ひどい雨だな」

その一言が、美奈の心を打った。
海斗の瞳には、自分と同じ「空っぽさ」があった。
彼が何に絶望し、何を失ったのかを詳しく知らなくても、その佇まいだけで分かった。この人は、私と同じように、世界の外側に立っている。

二人は、急速に惹かれ合った。
それは、単なる恋愛というよりは、共鳴だった。
海斗は美奈の繊細さと、その奥に潜む激しい渇望に気づき、美奈は海斗の持つ静かな絶望と、時折見せる強引なまでの独占欲に、心地よさを感じた。

彼らにとって、互いは「世界で唯一、本当の自分を晒してもいい場所」になった。

海斗は、美奈を誰よりも大切に扱い、彼女が求める「壊される快感」を、愛情というオブラートで包みながら、丁寧に与えた。
美奈は、海斗にすべてを預けることで、初めて「正しさ」という鳥籠から解放された。

それは、純粋で、あまりにも脆い、共依存に近い愛だった。

第二部：転落 ― 一線を越えて

大学を卒業した海斗と美奈は、都内郊外の築30年、日当たりが最悪なワンルームアパートで二人だけの生活を始めた。
狭い室内には、海斗が学生時代から使い古した野球道具と、美奈が大切にしていた数少ない洋書が雑然と並んでいた。壁紙はところどころ剥がれ、冬になれば結露で窓が白く濁る。しかし、彼らにとってそこは世界で唯一の安息地だった。

海斗は、知人の紹介で中小の営業職に就いた。毎日、安いリクルートスーツに身を包み、慣れない敬語で顧客を回り、精神的に摩耗しながらも、家に帰って美奈の笑顔を見るためだけに踏ん張っていた。
美奈は、親との関係をほぼ断絶し、地元の派遣社員として事務的に時間を切り売りしていた。彼女にとっての充足感は、仕事の中にはなかった。夕方にスーパーで特売の食材を買い込み、海斗と一緒に料理を作り、狭い食卓でささやかな食事を囲む。そんな「普通」の生活こそが、彼女にとって最大の贅沢であり、救いだった。

「海斗くん、今日のご飯は、あなたの好きな鯖の味噌煮だよ」

エプロン姿で微笑む美奈は、驚くほど美しかった。
彼女は、自分が持つ「美貌」という武器に無頓欲だった。適当に結んだ髪、薄いメイク。それでも、その肌の白さと、どこか儚げな瞳は、街を歩けば誰もが振り返るほどの輝きを放っていた。大学時代、何度もモデル事務所のスカウトを受け、大手から熱烈な誘いがあったのも、彼女の美しさが「完成されていた」からだ。だが、当時の彼女は、親という強固な檻の中にいた。美しさは、ただ管理されるための属性に過ぎなかった。

今の彼女にとって、その美しさを唯一、心から愛してくれる海斗の視線だけが、彼女を「女」として定義していた。

しかし、その幸福な静寂は、ある一つの「信頼」によって完膚なきまでに破壊される。

海斗には、大学時代から唯一、背中を預けられると思っていた親友、健太がいた。健太は、海斗とは正反対のタイプで、社交的で、常に新しいチャンスを追い求める、光り輝く人間だった。

「海斗、お前は真面目すぎる。今の時代、汗水流して稼ぐだけじゃ、美奈さんを幸せにできないぞ」

健太が持ちかけてきたのは、ある投資スキームだった。少額の出資で始められ、数年後には人生を変えられるほどの利益が出るという。海斗は、美奈にもっと良い生活をさせてやりたい、いつかは広い家に住ませたいという、切実で純粋な欲求に突き動かされていた。

彼は、貯金のすべてを投げ出した。さらに、美奈に内緒で消費者金融から、限界まで借り入れを行った。それが、人生最大の過ちだった。

健太は、資金を集めた途端に姿を消した。電話は繋がらず、SNSの垢は消え、共通の知人ですら彼の行方を知らない。

海斗が絶望したのは、金銭的な損失だけではなかった。自分が人生で唯一、心から信頼していた友人に、最も脆い部分を、残酷に利用されたこと。その事実が、彼の中の「誠実さ」という価値観を完膚に砕いた。

「まただ……俺は、また全部失った……」

高校時代の怪我で、自分のアイデンティティを奪われたあの時の感覚が、どす黒い濁流となって彼を飲み込んだ。どれだけ真面目に生きていても、世界は自分を嘲笑い、突き落とす。
追い打ちをかけるように、美奈の家庭環境も崩壊した。父親が経営していた会社が倒産し、彼女へのわずかな援助も絶たれた。親からは「お前が家を出て、親不孝をしたから不幸になった」という、理不尽な呪いの言葉が投げつけられた。

二人は、文字通り「底」にいた。
家賃は数ヶ月分滞納し、部屋には督促状が積み上がり、食卓に並ぶのは期限切れ間近のパンだけ。海斗は夜な夜な、消え入りそうな声で美奈に謝り続けた。

「ごめん、美奈。俺が、俺が馬鹿だったから。お前までこんな目に合わせて……」

だが、美奈は、海斗の痩せこけた肩を抱き寄せ、静かに微笑んだ。その瞳には、絶望ではなく、どこか恍惚とした光が宿っていた。

「いいよ、海斗くん。むしろ、これでいい。私たち、もう失うものなんて何もないじゃない。全部壊れて、ここから始まるなら、それも面白いよね」

美奈は、社会的な地位や親の期待という「鳥籠」が完全に壊れたことに、言いようのない解放感を覚えていた。彼女が求めていたのは、正しさの中での安らぎではなく、底辺まで堕ちきった先にある、共犯者としての連帯感だった。

そんなある日、二人が絶望に打ちひしがれて駅のホームに座り込んでいたとき、一人の男に声をかけられた。
高級車から降りてきたその男は、業界特有の、人を品定めするような鋭い視線を持つ、高級ソープ店のスカウトだった。

男の視線は、迷わず美奈に注がれた。

「君、モデルの経験はある？ないならなおいい。その、絶望しきった瞳と、圧倒的な美貌のギャップ……最高にエロいよ。うちの店で『指名本数NO.1』を狙える素材だ。今なら、君たちが抱えている借金すべてを肩代わりし、さらに十分な生活費を提示できる」

男が提示した条件は、今の彼らにとっては救いの神の囁きに聞こえた。

美奈は、隣に座る海斗を見た。海斗もまた、絶望に染まった瞳で美奈を見つめていた。
美奈の美しさを誰よりも愛している海斗にとって、彼女を他の男たちの欲望に晒すことは、耐え難い屈辱だった。だが、同時に彼は、自分もまたその泥濘に立ち会い、彼女をコントロールし続けたいという、歪んだ支配欲と破壊衝動に駆られた。

海斗は、スカウトの男を正面から見据え、ある条件を突きつけた。

「美奈がやるなら、俺も店に入る。ボーイとしてだ。彼女の身の回りの世話をすべて俺がやり、客の対応も俺が管理する。彼女を一人にするな」

スカウトの男は、一瞬、呆気に取られた。だが、海斗の瞳に宿る、狂気に近い執念と独占欲に、男は商機を感じた。
「……面白い。執着心の強いボーイが、最高の女をエスコートする。客にとっても、そういう『物語』がある女の方が価値が上がる。いいだろう、交渉成立だ」

こうして、二人は夜の街へと足を踏み入れた。

美奈は、その類まれなる美貌と愛嬌で、瞬く間に店の看板娘となった。
彼女は、客の前では完璧な「夢の女」を演じた。しかし、部屋のドアが閉まり、客が帰り、そして海斗が部屋に入ってきたときだけ、彼女は本来の、海斗に心酔する一人の女に戻った。

海斗は、ボーイとして店を切り盛りした。
客を美奈の部屋へと案内し、タオルを整え、飲み物を用意する。
彼にとって、それは地獄のような時間だった。

「あぁ、美奈ちゃん最高だぜ！ あんなに締め付けが激しい女は初めてだ」

部屋から出てきた客が、満足げに、そして卑猥に美奈の感想を口にする。その言葉の一つひとつが、海斗の胸を鋭いナイフで切り刻む。

だが、同時に。
その屈辱に耐えながら美奈の部屋のドアの外で待機しているとき、海斗の下半身は、かつてないほどに激しく脈打っていた。

（今、美奈は中で、誰に、どんな風に抱かれているのか……）

部屋から漏れ聞こえる、美奈の嬌声。自分以外の男に、快楽の絶頂へと導かれている愛する女の声。
その絶望的な状況こそが、海斗にとっての最大の媚薬となった。

生活は劇的に改善した。彼らは港区の高級マンションに住み、かつて欲しかったすべてを手に入れた。
昼間は、普通のカップルのように、映画を観たり、趣味の料理を楽しんだりする。だが、夜になれば、彼らは「ソープ嬢」と「ボーイ」という共犯関係に戻り、快楽と絶望が入り混じる夜の街へと繰り出した。

純愛という名の檻。
その檻の中で、海斗は自分が、美奈を他の男に差し出すことでしか得られない「倒錯した快感」に、完全に依存し始めていることに気づいていなかった。

～つづく～